

## 「神のアドベント」(ヨハネ 3:16~21)

キリスト教では、クリスマス前の四週間をアドベント・待降節といい、心静かに、神の御子の御降誕を待つ期間として大変大切に過ごします。

ちなみに、このクリスマスの備えの期間としての「アドベント」という言葉ではありますが、これは、「アドウェニーレ」というラテン語に由来いたします。「アドウェニーレ」というのは、もともとは「何かが起こってくる」「思いがけないことが自分の前に立ち現われてくる」、という意味の言葉であります。旧約聖書に預言されていた神の御子の御降誕もまた、何の前触れもなく、私たちの世界に突然立ち現れてきたゆえに、そのような言葉が使われたのかもしれない。

実は、英語で冒険を意味する「アドベンチャー」という言葉も、このラテン語の「アドウェニーレ」から来ていると申します。「アドベンチャー」と「アドベント」とが共に、ラテン語の「アドウェニーレ」に由来するといえますと、私たちは少し奇異に感じてしまいます。

なぜ奇異に感じてしまうか、それは、「アドベント」というのが「心静かに備える」時であるのに対して、「アドベンチャー」が、危険を冒すこと、すなわち冒険であり、心静かにというよりも、こころを乱す、こころを騒がす、そういう時を指し示しているからであります。

しかし、よくよく考えてみますと、クリスマスを待ちわびる私たちにとっては、確かに「アドベントの期間」というのは、「心静かに過ごすべき時」であるかもしれませんが、父なる神にとって、この時ほど、心が騒ぎ、かき乱される、そういう時はなかったのではないのでしょうか。

今日ともにお読みいたしましたヨハネ 3:16 は大変有名な個所であります。クリスチャンであれば、誰でも暗記している個所でしょう。そこにはこう書かれています。

**「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」**

父なる神にとって、最も大切なものは、独り子なる御子以外のなにものでもないはずですが。どのようなものをもってしても、それに代えることができないほど神は御子を愛しておられたはずだと思うのです。しかし、父なる神は、その御子をさえ与えるほどに、この世を愛されたと、いうのです。

私たちにとって、これほど理解しがたいものはありません。どうして最も大切なものを与えてまで、この世を愛さなければならなかったのか、それを私たちは理解することに困難を覚えるのであります。

私たちはふつう、愛とは、手放すことではなく、手放さないことである、と考えます。大切なものをしっかりと守る、それが愛の本質であると考えます。

たとえば、親は、最も愛する我が子が死に瀕しているならば、助けるために、自らが我が子の身代わりにさえなろうとします。現に、子供が臓器の障害をもっていたために、その身代わりに自らの臓器を提供したという話を聞くことがあります。そして私たちは、そうしたあり方の中に一つの愛の形を見るわけです。

ところが、「神の愛」は、最も大切なものを守るのではなく、最も大切なものさえ与えるというのです。失わないのではなく、失う危険を冒すというのです。危険を冒す、冒険をする、それこそが「神の愛」であると、聖書はそういうのです。

しかし、神が世を愛されたのは、御子よりもこの世界の方が価値があったからでは決してありませんでした。むしろ、この世界は、神に愛されるに値しない世界であったのです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」と言う場合の「世」とは、ギリシャ語では「コスモス」という言葉であります。この「コスモス」という言葉は、ギリシャでは「調和のある美しい世界」のことを指します。またこのギリシャ語の「コスモス」という言葉があてられた花は、大変美しい花であります。

ところが、神は、この世界をそのような美しい「調和のある世界」、コスモスの花のような「美しい世界」とは決して見ておられなかったのです。

もし神が、この世界を「調和のある美しい世界」と見ていたのであるなら、「コスモスの花のような美しい世界」であると神が見ていたのであれば、神は、自らの最も大切なものを手放す必要はまったくなかったであります。

もし私たちが、神に愛されるにたる者であったとするなら、神は、私たちのために御子をお遣わしにはなる必要は、まったくなかったと思うのであります。

しかし、神が御子を与えるほどに世を愛されたのは、私たちが罪深く、私たちの世界が、調和ではなく、不調和を来しているのを、神は知っておられたからであります。そしてそれを御覧になって、心を痛めておられたからであります。神は私たちの世界を御覧になって悲しんでおられたのであります。

神は、最も愛する御子をこの世にお与えになられました。それは、神にとって、身を切られるような出来事であります。しかし、そうまでして、神は、この世の不調和を、この世の罪をあがなおうと考えておられたのであります。

しかし、私たちには、キリストがお生まれになってから、二千年の時が経っているにもかかわらず、依然、世は不調和をきたしているように感じます。キリストが世に与えられてから、二千年もたちますが、

いまだに私たちは罪に支配されているように感じるのです。

有名な作曲家にマーラーという方がいます。彼は、ボヘミアの小さな村で、ユダヤ人(ユダヤ教徒)の両親の下に生まれました。彼の父、ベルンハルトは、最初、馬に乗る御者の仕事をしておりましたが、それに満足がいかず、次から次へと職を転々とするということをいたしました。

そしてこの父は、家族に対して、絶対的な権力を持ち、平気で子供をむちうつということをいたしましたし、妻に対してもしばしば暴力を振るうとすることをしました。その結果、マーラーは、父に対しては、決して親しみや、やさしい感情はいただいたことがない、といます。

こうした環境で過ごしたマーラーには、一つの才能がありました。音楽の才能であります。そして、そうした才能をもちいて、彼は、そうした不幸な生い立ちを克服し、成功のステップを踏んでいくようになります。

小さい温泉場の指揮者をふりだしに、ついにはウィーンの宮廷劇場の芸術監督という世界最高のポストにまでのぼりつめたのです。そしてウィーン社交界の華といわれていた才媛アルマと結婚さえもいたしました。

しかし、そうして頂点までのぼりつめたマーラーは、オーケストラのメンバーや、歌手に対して、絶対的な権威者として君臨するようになります。

彼らに、過酷なほどの緊張と、努力を要求し、いらだつと、指揮台をふみならし、失敗した楽員には、指揮棒をつきつけて、責めたというのです。こうした彼の振る舞いは、決して仕事に関してだけではありませんでした。彼は、最愛の妻アルマに対しても同様のことをしたというのです。

こうした現実の中で、マーラーは、罪の意識にさいなまれた、といます。そして最も嫌っていた父に自分が似ていくことに、いいようのない恐れを感じるようになっていったのです。こうした中、彼の父ベルンハルトが死にます。そしてそれ以降、マーラーは、自らの罪と死の現実の恐怖から、逃れられなくなるのです。

ところが、そうした罪と死の現実の直中で、彼が手にしていたもの、すなわち、地位や名誉や財産というものは、何の救いをも与えるものではありませんでした。そうしたものは、彼の闇に対して無力であったのです。

しかし、そうした人間の苦しみの直中に、人間の罪という現実の直中に、父なる神は、御子を与えてくださったのであります。闇の中に決して消えることのない灯りとして、神は御子を与えてくださったのです。

マーラーは、そのことに気づいたのであります。深い闇の中で確かに光を見たのであります。いや、彼は、光を見ただけではなく、その光を信じ、受け入れたのであります。

その後マーラーは「交響曲第二番・復活」を書くこととなります。それは、彼がそうした闇の直中に見出した光を証しする曲でありました。

彼は、洗礼を受け、キリスト教徒になりました。自らの罪と死との現実から救いうる唯一の光を見出したからであります。

クリスマス、それはこの暗闇の直中に、光が与えられた出来事であります。たとい、罪と死の現実がわたしたちの世界を支配しているように見えても、闇が私たちの現実をおおっているように見えても、確かに神は、私たちに光を与えてくださり、それは、今もなお信じる者に救いの光を与え続けているのです。

アドベントのこの時、私たちは、父なる神のその痛みの甚大さを覚えつつ、その救いの光の与えられしクリスマスへと心静かに備えていきたい、そう思うものであります。